

松下幸之助記念財団 研究助成

## 研究報告

【氏名】高垣 垂矢

【所属】(助成決定時) お茶の水女子大学大学院人間文化研究科国際日本学専攻

【研究題目】近世の皮革流通と地域社会

## 【研究の目的】

本研究は、近世社会において、皮革の生産・流通に関わった諸地域や人々を分析することで、皮革の流通構造を解明する。それを通じて、当時の身分制や流通、対外関係について明らかにすることを目的とする。

近世日本において、皮革は被差別民である「えた」が生産していた。そのため、部落の歴史を解明するための皮革業という観点から研究が行われてきた。そこで本研究では、第一に、部落史の一部門となっていた皮革業を、近世社会の一部として位置づけていくこと、第二に、地域々々の流通を精緻に実証したうえで、西日本一帯に広がる皮革の流通構造を提示していくことにした。

また、本研究は、現代社会における問題解決につなげることも目的としている。第一に、皮革業を近世社会に位置づけることで、正確な歴史像を提示し、部落問題の解決に寄与すること、第二に、近世の日本と朝鮮との関係を、実証的な分析を重ねることで解明し、両国に正確な歴史を伝え、相互理解を促進することである。

## 【研究の内容・方法】

先行研究において、西日本で生産された牛馬皮は、大坂渡辺村に流通していたこと、その流れには、朝鮮から輸入される牛皮も含まれていたことが指摘されてきた。しかし、その後の研究は、流通の主導権を握っていた、渡辺村に集住する皮問屋の活動を解明する方向に進んだ。その結果、「大坂渡辺村に集住する皮問屋が、流通の中核的な担い手であるため、西日本で生産された牛馬皮は、渡辺村をセンターとして集荷される」という流通像が提示されることになった。

そこで本研究では、第一に、史料調査を重ねて事例を蓄積し、新たな流通像を提示すること、第二に、皮革の流通を近世社会に位置づけるためにも、流通史の研究成果を踏まえて分析を行うことにした。近世後期には新興商人など、新たな流通の担い手が地方に登場したため、流通における問屋の地位が相対的に低下することが流通史研究で解明されてきた。そこで、皮問屋の手代や手先など、地方で牛馬皮の売買を主体的に行う「皮商人」に着目することで、流通の構図を再検討することにした。また、朝鮮からの牛皮の流通についても、貿易の実態を解明することを目指した。

史料調査を行ったのは、以下の機関である。

- ①2011年11月および2012年4月には、九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門において、小倉藩領田川郡の大庄屋の文書「六角家文書」などの調査を行った。
- ②2012年3月には、福岡県人権研究所において、「嘉永元年戌申日記」の調査を行った。
- ③2012年3月および8月には、福岡県立図書館において「黒田家文書」などの調査を行った。
- ④2012年1月には、大分県立先哲史料館および大分県立図書館において、「府内藩記録」の調査を行った。

- ④2012年4月および5月には、山口県文書館で「毛利家文庫」、「徳山毛利家文庫」の調査を行った。
- ⑤2012年9月には、韓国国史編纂委員会で「対馬藩宗家文庫」の調査を行った。

#### 【結論・考察】

本研究では、地方における「皮商人」の活動を解明することで、つぎのような結論を得た。

(Ⅰ)十八世紀後半以降、皮問屋への集荷を担ったのは、地方の「えた」と直接関係を持つ、皮問屋の手代たちであった。十九世紀には、畿内周辺や地方(周防・豊後)の「えた」にも、牛馬皮を集荷する者が現れた。皮問屋は地方で活動する「えた」たちを、前貸しなどを通じて掌握しようとするができなかった。そこで、地方の「えた」を手先として、一時的に関係を結び、集荷を手伝わせるが、手先は、様々な皮問屋の集荷をしていたため、皮問屋による集荷の安定は揺るがされていった。

(Ⅱ)地方における「皮商人」の流通活動が、牛馬皮の集荷における渡辺村のセンターとしての位置を相対的に低下させていた。

今後は、国史編纂委員会において調査した、倭館の代官が記した「毎日記」の分析を進めることで、朝鮮からつながる流通構造について解明していくことを課題としたい。